

[芸術教育記録]

「ダンスを通してコミュニケーションスキルを身につける」 ことを重視した授業実践記録

—逃げないで人と関わり合うための技能の獲得に向けて—

A Record on Practices Whose Emphasis is “To Help Students Gain Communication Skills through Dance and Relational Body Work”

—Towards an Empowerment of Individuals for Better Communication Skills—

楠原竜也

Tatsuya Kusuhara

〈抄 録〉

この芸術教育記録は、1年次必修科目「身体表現Ⅰ〈ダンス〉」において、「ダンスを通して人と関わり合いながら、コミュニケーションスキルを身につける」ことを重視した授業の実践記録である。授業における取り組みが、放課後の集中授業を含む実習授業「パフォーマンス」へのファーストステップと位置付けられることが望ましい。

キーワード：ダンス、コミュニケーション、パフォーマンス、アイコンタクト、コンタクト、フォローイング

Abstract

This essay aims to convey programs of the dance classes whose emphasis is “to help students gain communication skills through dance and relational body work” as a compulsory subject in the first year of the university. I hope that it will be the first step for a practice “The performance classes” include an intensive classes of after school.

Keywords: dance, communication, performance, eye contact, contact, following

1. 授業にあたって

1.1 はじめに

グローバル化の進む現代社会では、多様な背景を持つさまざまな人との交流において言葉の表現だけでなく、表情や視線、動き等の身体表現が重要になる。筆者は、これまで文化庁の「文化芸術による子供の育成事業～芸術家の派遣事業～」¹⁾ や文部科学省の「児童生徒のコミュニケーション能力の育成に資する芸術表現体験事業」²⁾ 等の派遣指導者として、小学校を始めさまざまな現場において身

体表現のワークショップで実践を重ねてきた。その中で、身体による表現活動の体験が子どもたちの表現や生活に大きな影響を与えており、積極的になったり、人の目を見て話すようになったりすることを目の当たりにしてきた。

国を挙げてコミュニケーション能力を養うことを推進している現在、これらは、決して児童生徒に当てはまるだけのことでなく、大学を始めとする高等教育機関においても同様のことが言える。

1.2 担当科目について

筆者が非常勤講師をしている玉川大学では、『玉川大学 2016履修ガイド 平成28年度入学生用』³⁾によると、芸術学部の「人材養成等教育研究に係る目的」で、「芸術学部は、本学創立の理念である全人教育のもと、全人的な陶冶を基本理念として、総合大学における芸術学部の特色を活かした芸術教育を目指している。」、また、「パフォーミング・アーツ学科は、パフォーミング・アーツの体系的理解に基づき現代社会における上演芸術や身体表現の役割を学修し、コミュニケーション能力と総合的实践力の育成を通して社会に貢献できる人材を育成する。」と掲げている。

筆者が担当している科目の中の「身体表現」と「パフォーマンス」について、『学校案内 玉川大学 芸術学部 2017』の「玉川大学芸術学部で学べること 社会貢献できるクリエイターになるための33種類の学び」⁴⁾において次のように説明されている。

「身体表現」…より高度な身体表現の技術を修得する授業です。この科目は卒業まで継続して取得して行くことの出来る「身体表現」の最初に履修する科目です。専門に学ぶ事の出来る実技はリトミック、演技、狂言、日本舞踊、バレエ、ジャズ、コンテンポラリーダンスがあります。公演を前提とした実習授業「パフォーマンス」と併せて学ぶことで、実技技術の奥深さ、重要性を経験的に学んでいくことができるのはもちろん、効果的な身体表現方法を身につけることで、実践的な自己表現力を養うことができます。(2014年度よりカリキュラム改編にて従来の「演技」「狂言」「日本舞踊」「バレエ」「ダンス」といった科目名が「身体表現」という1つの科目名に統一される。全体の科目については、教育課程表等⁵⁾を参照。)

「パフォーマンス」…「身体表現」「音楽表現」「舞台技術・企画構想」の科目で学んだ表現力や知識、技術を実際に舞台を作り上げる事で総合的に学んで行きます。実際に舞台に立つことはもちろんのこと、演目の企画運営、宣伝、集客、舞台技術まで各専門の指導教員のもと基礎から学んで行きます。パフォーミング・アーツ学科のいわばメインの科目で、必修科目として、その知識、技術、表現力を磨いて行きます。豊かな表現力を備えたアートと社会を繋ぐコミュニケーションとコーディネートのプロフェッショナルを養成する授業です。(「パフォーマンス」は、放課後の集中授業を含む実習授業である。また、パフォーミング・アーツ学科では、これを「プロダクションワーク」「実習公演」とも呼んでいる。)

以上のことから、「パフォーミング・アーツ学科のいわばメインの科目」である公演を前提とした実習授業「パフォーマンス」へ繋げるための「表現力や知識、技術」を「身体表現」「音楽表現」「舞台技術・企画構想」の科目で学ぶ必要がある。その中の1つに「身体表現」があり、まず導入として1年次に学修するものが「身体表現Ⅰ」である。

今回、多い時には100名以上の大勢の学生と試行錯誤しながら共同作業していく「パフォーマンス」へのファーストステップとなるためにも、特に「コミュニケーションスキル(逃げないで人と関わり合うための技能)を身につける」ことを目標の1つに行っている「身体表現Ⅰ〈ダンス〉」の授

業について報告する。

2. 「身体表現Ⅰ」授業について

2.1 科目概要

対象とした科目は以下の通りである（表1）。

（表1）科目概要

科目名	身体表現Ⅰ
単位数及び履修条件	2単位 必修授業（1年次の春、または秋セメスターのどちらかで履修する必修科目である。）
開講	春、秋セメスター
対象学生	パフォーマンス・アーツ学科1年生及び再履修者
履修者数	春、秋セメスター約70名ずつ

2.2 授業概要

授業概要は以下の通りである（表2）。

（表2）授業概要

授業概要	舞台芸術における身体表現の様々なジャンルを実技を通して学ぶ科目。演技、日本舞踊、コンテンポラリーダンス、バレエなど、多岐に渡るジャンルを実際に体験し、今後の学修の方向性と専門を考える基礎となる科目。一年次に偏りのない多角的な視点から身体パフォーマンスを学ぶことによって、「身体」で表現するという事の礎とする。授業は各専門の教員により、各ジャンルから3回の授業を受ける。（シラバスより）
------	--

2.3 到達目標

到達目標は以下の通りである（表3）。

（表3）到達目標

到達目標	様々なジャンルの身体表現を理解できる。それぞれの身体表現の特徴・違いを述べる事が出来る。（シラバスより）
------	--

2.4 授業計画

授業計画は以下の通りである（表4）。

（表4）授業計画

授業計画	この授業は「各専門の教員により、各ジャンルから3回の授業を受ける。」とシラバスにあるように、履修者約70名を約14名で1括りとして5グループ（ABCDEグループ）づくり、学生たちが3回ずつ入れ替わっていく形態である。3回の授業の中で各ジャンルの身体表現方法のすべてを修得することは、非常に難しいことであるため、2年次以降の選択必修科目（「身体表現Ⅱ」「身体表現Ⅲ」等）でどのジャンルを特に専門として学修したいのか決定するための指針にもなっている。
------	---

3. 「身体表現 I 〈ダンス〉」授業について

3.1 授業概要

授業概要は以下の通りである（表5）。

（表5）授業概要

授業概要	「身体を使った表現活動としての導入」として表現するための基礎的な身体技法を獲得する。また、実習授業「パフォーマンス」において、すぐに他者と積極的に関わっていけるように（コミュニケーションできるように）、「ダンスを通して積極的に人と関わり合いながら、コミュニケーションスキル（逃げないで人と関わり合うための技能）を身につける。」
------	---

3.2 到達目標

到達目標は以下の通りである（表6）。

（表6）到達目標

到達目標	「身体を使った表現活動としての導入」として表現するための基礎的な身体技法を身につけることができる。 「ダンスを通して積極的に人と関わり合いながら、コミュニケーションスキル（逃げないで人とかわり合うための技能）を身につける」ことができる。
------	---

筆者は、この「身体表現 I」での〈ダンス〉において、「身体を使った表現活動としての導入」として表現するための基礎的な身体技法の獲得はもちろん、実習授業「パフォーマンス」において、すぐに他者と積極的に関わっていけるように（コミュニケーションできるように）するためにも、逃げないで人と関わり合わなければ成り立たない〈ダンス〉の授業を行っている。

3.3 授業計画

筆者は、国内外のプロの現場で経験してきた演劇やダンスのテクニックやトレーニング、また子どもたちとの身体表現活動で実践してきたことをコミュニケーションという視点から大学生向けにアレンジしている。わずか3回ではあるが、自己と他者との違いに気づき、今後多様な他者と試行錯誤しながら共同作業していくための第1歩として、身体を通してコミュニケーションを取ることを重視して以下の授業計画を立てている（表7）。なお、発展の主な活動（メインピックス）は必ず行うが、その都度の学生の状態を考慮して、導入・展開は多少変更しながら行っている。

（表7）授業計画

授業回	テーマ	主な活動（メインピックス）
第1回	アイコンタクト	アイコンタクトダンス
第2回	コンタクト（身体接触）	コンタクト・ワーク
第3回	フォロー（同調・模倣）	フォローイング

4. 授業実践記録

4.1 第1回（1 / 3回目）

4.1.1 導入：自己紹介と授業概要の説明

「身体表現 I 〈ダンス〉」のねらい、毎時の授業内容、注意事項について説明し、問題意識を持って

授業に取り組むように促す。

4.1.2 導入：じゃんけんウォーミングアップ

誰にでもなじみのあるじゃんけんを応用した活動により、他者と関わりつつ集中力と瞬発力を養いながら心と身体を暖めていき、表現活動をするためのコンディションを整える。

4.1.3 展開：トンネル

2人組で片方が身体でさまざまなかたちのトンネルをつくり、もう片方がそのトンネルをさまざまなくぐり方をしていく。どちらも常に新しいかたちや動きができるよう創意工夫していく。

4.1.4 発展：アイコンタクトダンス

2人組で目と目を合わせたまま、逃げないで人と関わり合いながら、身体を自在にコントロールして動く。最終的には、自分の意志で次々と相手をチェンジしていき、動きながら相手とコミュニケーションを取っていく。

4.1.5 振り返り：コメントシート記入（自由記述形式）

各授業回において、何を学び、何に気づき、何を感じたか、また他者との関係の中で何を発見したか等、言語化することで自己の学修を十分に振り返る時間を持ち、今時間に学んだことを次回以降も常に意識して行えるように促している。また、「身体表現Ⅰ」の受講レポート（自由記述形式・最終回に提出・各ジャンルについての記述と全体についての記述）の作成に向けて、「身体表現Ⅰ〈ダンス〉」での各自の学修を忘れないためにも行っている。

4.2 第2回（2 / 3回目）

4.2.1 導入：自分の身体を起こすウォーミングアップ

空間全体を歩きながら空間に対する意識を高めつつ身体を暖めていく。また、他者とコンタクトをする前に自己の身体の各部位を意識できるように、次々と掴んだり叩いたりして起こしていく。そして、アイコンタクトをしながら歩いたり、次々と握手をして走ったり、お互いの名前を呼び合いジャンプやダウンを同調することで第1回で築いた関係性をさらに深めていく。

4.2.2 展開・発展：コンタクト・ワーク

相手とコンタクト（身体接触）することにより呼吸・重さ・力・意思を受け渡し合い、身体で対話（コミュニケーション）しながら動いていく。コンタクトによって他者の状態を読み取る場所から始まり、そこから自己の心身と他者の心身との対話をつくり出していく。

4.2.3 振り返り：コメントシート記入（自由記述形式）

4.3 第3回（3 / 3回目）

4.3.1 導入：トムとジェリー（鬼ごっこ）ウォーミングアップ

ねこ（トム）とねずみ（ジェリー）の役回りを交代しながら進行する鬼ごっこを行う。タッチや円になって周囲を囲む人の足の間をくぐり抜けることで「ねこ（トム）」＝鬼、追いかける側と「ねずみ（ジェリー）」＝逃げる側とが入り替わる少し複雑なルールの中で行うことで、集中力と瞬発力を

養いながら心と身体を暖めていく。また、講師が「今誰が鬼か」わかるように名前を呼んでいくことで、その場にいる皆が今一度顔と名前を確認できるような機会にし、第1、2回目に引き続きさらに関係を深めていく。

4.3.2 展開：フォローイング

自分の中で決めた1人をひたすら追う。講師の指示で追う相手や、互いの距離を変えていく。次に2人を対象として定め、自分とその2人とで一直線や正三角形に並んでいながら空間に対する意識を高めていく。

4.3.3 発展：フォローイング

2人組になって、一方はリズム・テンポ・質感等を変化させながら、いろんな動きを生みだして、空間を移動していく。もう一方は1mの距離を保ったまま相手の動きをフォロー（同調・模倣）していく。そのフォローするという動きのやり取りから、自己と他者（の身体の違い等）を明確にし、コミュニケーションを図る。また、さまざまな相手と交代しながら繰り返し行う中で、自分自身の動きの特徴や癖等を認識して、新しい動きのボキャブラリーの探求・拡大を図る。歩き→動き→音の刺激を利用しての動きへと発展させていく。

4.3.4 振り返り：コメントシート記入（自由記述形式）

5. 受講レポート

※2016年度春学期「身体表現Ⅰ」履修者65名のレポートより抜粋した（〈ダンス〉のみ）。

- 学生1 「相手を信頼し、相手に委ねるという、信頼関係をもつことの大切さを学んだ。」
- 学生2 「相手の力、自分への働きかけを利用することによって、遠くへ飛ぶことも、複雑な姿勢をとることもできることに気づいた。一緒に行う人数が増えれば、さらに複雑で幅広い動きができ、その中で試行錯誤や変化を楽しむことができた。」
- 学生3 「会話のみならず、体でコミュニケーションをとることで得られるものがあることができました。」
- 学生4 「互いに信頼関係が成り立ってくるにつれ、自由に大胆な動作ができるようになってくるのを体感した。更に、相手に触れることにより信頼関係は深まるということを経験し、実感することが出来た。」
- 学生5 「グループ内でアイコンタクトを取ることで、より良い関係を築くことができた。この授業を通してコンテンポラリーの楽しさを学べたのと同時に、グループの人たちと良い関係を築け、それにより人とアイコンタクトを取ることの大切さを改めて感じる事ができて良かったと思う。」
- 学生6 「この授業では身体に乗ったり持ったり、と接触が多かったがやはりコンタクトが重要で、それは言葉ではなく相手の動きや呼吸を感じることでもあると思った。」
- 学生7 「初めはグループの人とあまり話さなかったのですが、この授業でみんなと関わり合うことで仲よくなれてよかったです。」
- 学生8 「グループやペアを作る機会が多かったのも、あまり話したりすることがなかった人とも仲よくなれた。この授業をしてみて自分の体でたくさん事ができるのか実感したし、私は自

分から話しかけるのが苦手だったが、この授業のおかげで苦手意識がなくなった。」

- 学生9 「ペアを組む機会も多かったので、仲のよい友達だけでなくあまり話したことのない人とも組むように心がけた。またアイコンタクトをしながら動いたり、友達の動きを真似したりと初めてやる事ばかりで、自分の身体でこんなにもいろいろなことができるのかと、とても感心した。私はコンテンポラリーを通して他人に対して積極的になることができたように感じる。」
- 学生10 「ダンスは基本的にひとりでやるものだと思っていたが、人と関わり合うこと、目線を合わせることも大切だと感じた。この授業では、1番グループの人たちの距離が縮まったと感じた。」
- 学生11 「身体と身体とのふれあいを通じて、コミュニケーションを図り、他者を知ることが学びました。…最初は少なかった動きのレパートリーが他の人たちの動きを取り入れていくことによって徐々に増えていったように感じます。体を叩いたり、さすったりして、自分と相手の身体を知り、どう関わっていくべきかを考えさせられました。…多くの様々な人たちと関わって行って信頼関係を築いていきたいです。」
- 学生12 「自分とほとんど初対面でクラスも違う生物・人を信頼して体重をかけあってバランスをとったり移動したりすることは簡単ではなかった分、人を信頼することの重要さに気づいた。」
- 学生13 「体の使い方や仲間を信頼することの大切さを学んだ。…様々な体の動かし方、アイコンタクト、そして何よりも仲間を信頼することが大切だと思った。倒れてくる相手の体を支えたり、お互いの体を押し合ったりなど、相手を信頼しているからこそできることである。…信頼と空間を広く感じることは、体を大きく使うことは、ダンスだけでなく演技をする上でも大事なことである。それを常に忘れないようにこれからも多くのことに取り組んでいきたいとこの授業を通して改めて思った。」
- 学生14 「二人組になって動く時に、アイコンタクトがいかに重要かわかった。アイコンタクトをすることで相手の意思が伝わり、適度な緊張感と集中力が高まる。」
- 学生15 「相手を不安にさせないようにし、信頼や安心感を持ってもらうには、どうすべきかを沢山考えさせられました。」
- 学生16 「自分で立たずに相手に体重を預けて立つのは2人の信頼関係が必要だと思いました。最初のうちはお互いが信用できておらずすぐ崩れていました。しかしだんだんお互いを信用するようになり、お互いが体重を預けて前後に移動するということがススイできるようになりました。」
- 学生17 「今までこんなに人と関わったことはないのではないかと思います。人と関わることで自分とは違う感覚や、自分自身のことを知るきっかけになりました。力加減1つにしても自分の普通と相手の普通では大きく異なることを身を持って体験することができ、人と関わる上で相手を知るということを改めて考えさせられました。」
- 学生18 「相手の動きを読み、その行動に臨機応変に対応しなくてはならない。…信頼することと、全体重を預けることが大事になってくる。…協力することによって思いがけないこともできることが分かった。」
- 学生19 「ダンスを踊ることに演技と同じように相手を信頼することが大切なのだと思ふ事ができた。」
- 学生20 「人と人との関わりを学ぶことができました。相手を信頼して体を預けたりしてみて、信頼する・してもらうことの大切さも改めて知ることができました。」

学生21 「相手を信頼してないとできないことが多く、信頼して息を合わせることでそれぞれの動きを理解することができた。自分の良さを出しつつ、相手の良さも引き出すことが必要と気付いた。」

6. 受講レポートのまとめと今後の課題

「ダンスを通して人と関わり合いながら、コミュニケーションスキル（逃げないで人と関わり合うための技能）を身につける」というこの授業の目標を達成するために計画した授業内容は、上記の「授業レポート」からも効果的であったと考えられる。

特に、レポートで学生たちが使っているコミュニケーションに関する単語を掲げると、「信頼」「身体でコミュニケーション」「アイコンタクト」「呼吸」「仲よくなれた」「他人に対して積極的になれた」「距離が縮まった」「他者を知る」「動きのレパートリーが他の人たちの動きを取り入れていくことによって徐々に増えていった」「自分と相手の身体を知る」「人と関わることで自分とは違う感覚や、自分自身のことを知った」「協力することによって思いがけないこともできることがわかった」「人と人との関わり」「自分の良さを出しつつ、相手の良さも引き出すことが必要と気付いた」等、他者と関わることに對する気づきが数多くあった。特に「コミュニケーション」「信頼」についてそれぞれレポート全体の30%以上、「自分や他人の身体を知る」「他者理解」についてそれぞれ20%以上あった。このことから、他者とのやり取りや相互作用の重要性や関心が現れており、今後の学修へ向け、コミュニケーションへの意識を高くすることができたと考えられる。

一方、やはり3回という非常に限られた中であるため、積極的にコミュニケーションを取っていくための「きっかけづくり」までで留まってしまうことも否めない。また、もう1つの目標である「『身体を使った表現活動としての導入』として表現するための基礎的な身体技法を身につけることができる」においては、固定概念に縛られずに自分の思考と身体を使って表現することへの関心は生まれているが、身体技法の獲得まではいかないのが現状である。導入とは言え「お試し」感が否めない。現実的には6～7回程度行えるとダンスの本質にもう少し触れて身体にも落とし込めるのではないか。そのためにはカリキュラムの検討も必要である。しかしながら、この授業形態の中においても、学生たちにとって最大限の学修となるよう、他の教員と共に目指すべき学生像を共有して、よりよき授業計画を練っていきたい。

注

- 1) 文化庁『文化芸術による子供の育成事業～芸術家の派遣事業～』
(<http://www.kodomogeijutsu.go.jp/haken/index.html>)
- 2) 文部科学省『平成28年度「児童生徒のコミュニケーション能力の育成に資する芸術表現体験（芸術家派遣）」〈学校申請方式〉応募要領』、2016年
(http://www.kodomogeijutsu.go.jp/communication/dl/h28/shinsei_bosyu.pdf)
- 3) 玉川大学『玉川大学 2016履修ガイド 平成28年度入学生用』、2016年、p151
- 4) 玉川大学『学校案内 玉川大学 芸術学部 2017』、2016年、p15
- 5) 玉川大学『玉川大学 2016履修ガイド 平成28年度入学生用』、2016年、pp157-161

参考文献

- 文部科学省『コミュニケーション教育推進会議審議経過報告書 子どもたちのコミュニケーション能力を育むために～「話し合う・創る・表現する」ワークショップへの取組～』、2011年
- 法月敏彦『芸術教育におけるジャンル・技能職掌の解体 ―玉川大学における演劇教育の変容に関する報告を中心に―』、西洋比較演劇研究 第2号、2003年、pp. 21-29
- Marion Gough『ダンスの教え方・学び方』、玉川大学出版部、1997年